

「平和」について考える授業づくり

—学部1年次の演習授業における実践事例—

松原 幸恵

Creating classes to think about “peace”:
Practical examples in seminar classes for first-year undergraduate students

MATSUBARA Yukie
(Received December 15, 2022)

キーワード：平和、平和教育、討論学習

はじめに

2022年12月、毎年恒例の「今年の漢字」が発表された。第1位は「戦」である。この漢字が選ばれた理由として、「円安・物価高・電力不足や感染症など、生活の中で起きている身近な『戦』い」「サッカーW杯や北京冬季五輪での熱『戦』、野球界での記録への挑『戦』に関心が集まる」も挙げられたが、何と云っても「ウクライナ侵攻、北朝鮮の相次ぐミサイル発射などにより『戦』争を意識した年」¹⁾、その中でも「ウクライナ戦争」がやはり大きいだろう。

この件にも象徴されるように、2022年は、これまでにないほど「平和」の危うさを見せつけられた年であり、憲法学を専門とする筆者も、大学の担当授業で平和の問題を重点的に取り扱う必要があると考えた。しかし、通常の授業（例えば、「日本国憲法」）で、平和の問題を扱うとしても、全体のごく一部でしかなく、とても「重点的」とは言い難い。そこで、山口大学教育学部専門科目「社会科基礎演習」（後期）の担当8回分において、この問題に取り組むことにした。

1. 授業の概要

「社会科基礎演習」は、教科教育コース社会科教育選修を担当する教員によるオムニバスの授業であり、各教員の専門分野ごとの固有な問題意識、研究方法などに触れることを通じて、受講生が大学における学びの「基本」を学ぶものである。当該授業の受講生は、社会科教育選修1年（11名）であった。

まず、初回授業において、受講生に対し、次のような「授業のテーマ」を提示した。

【本授業のテーマ】「平和」について考える授業づくり

この授業は、「平和」について考える授業案を各自が作り、模擬授業を行い、討論することで、授業実践のための技量を養うと同時に、各自が平和についての考えを深めることを目的とする。

今回の模擬授業では、各自が選んだ本1冊（ジャンルは自由）を教材として使用する。

上記テーマを設定したねらいは、学生に「平和」の問題をより深く、多角的に考察してもらうことにある。ひとくちに「平和」と言っても、それについての人々のイメージは一樣ではない。最もポピュラーな「平和」の定義として、「直接的・物理的暴力としての『戦争』がないこと」が挙げられるが、ここで言う「戦争」にしても、「侵略戦争」に限定する（すなわち、自衛戦争の余地を認める）考え方²⁾もあれば、自衛戦争も含めた一切の戦争（武力行使）を否定する考え方もある。また、「平和」の概念をさらに広げて、抑圧や貧困・差別等の「構造的暴力」の不在³⁾、すなわち、人権保障まで含める考え方もある。したがっ

て、「平和は大事である」と多くの人間が同じ台詞を語ったとしても、各自の平和の含意が違っていれば、共通理解ができているとは言い難いのである。

こうした観点から、受講生には、平和に関する自己の認識を深めることに加え、他者の認識にも触れてもらう必要があると考え、できるだけ「語り合う」時間を設けることを心がけた。「語る」という作業は、自身の頭の中にある漠然とした考えを明確化することに資するからである。また、「語る」対象を大学生同士に設定するだけでは、自身の「語り」の訓練としては不十分ではないか、小学生・中学生・高校生も対象に設定することで、より「相手」を意識して語るができるのではないかと考えた。そこで、各自が「模擬授業」を行うという方法を選択した。

とは言え、受講生は、模擬授業など全く経験のない1年生である。授業を組み立てる作業を一人で行うには当然困難が伴うことが予想された。そこで、作業途中にグループワークを取り入れることにした。受講生に指示した「授業の進め方」は次の通りである。

【授業の進め方】

(1)準備作業

全体で4つの班(3名×3、2名×1)を作り、対象(小学1～3年生、小学4～6年生、中学生、高校生)別に担当を決める。

→各自で教材としてふさわしいと思う本を探す。

→班内で教材と授業内容が被らないように調整する。

→各自で模擬授業の準備をする(授業形式は自由だが、ねらいを明確化しておくこと)。

*発表者は教材の本を必ず読破しておくこと

(2)模擬授業

発表時間は各20分程度(担当者以外は生徒役)。発表後は、皆で質疑応答や講評を行う。

(1)の準備作業として、授業3回分を設定した。続く4回を、(2)①小学1～3年生を対象とする模擬授業(1班・2名)、②小学4～6年生を対象とする模擬授業(2班・3名)、③中学生を対象とする模擬授業(3班・3名)、④高校生を対象とする模擬授業(4班・3名)に充て、最終回(第8回)を「振り返り・まとめ」の授業とした。

ここで、模擬授業を行うにあたり、「本1冊を教材として使用する」ことにした意図について述べておこう。前述した「ねらい」から、受講生が独善的な認識に陥らないような仕掛けが必要で、それには、大学生同士のコミュニケーションだけでは足りず、本を1冊しっかり読み通すことで、その足りない部分を少しでも補うことができるのではないかと考えた。そのため、上記【授業の進め方】(1)で「*発表者は教材の本を必ず読破しておくこと」を指示した。

2. 授業の実際

2-1 準備作業

2-1-1 第1回授業

初回の概要説明の後、直ちに準備作業に取りかかり、班と発表日を確定した。班分けは、受講生同士の話し合いで決まったが、小学生対象の班を決めるのに、若干時間がかかったようだった(その理由として、社会科教育選修の学生には、中学校以降の教員志望者の方が多いことが考えられる)。それ以上の具体的な準備作業は、第2回以降に行うこととしたが、受講生には、第2回授業時に、教材とする本の候補(複数可)を持って来るよう指示をした。

2-1-2 第2回授業

第2回では、教材とする本を確定し、各班で授業の進め方についてアイデアを出し合い、授業案のイメージを作っていくようにした。そして、各班の話し合いの成果を全体で共有した。最後に、授業内レポートとして、次のような課題を示した(表1)。

表1 第2回授業内レポート課題

説問	次の各問いに答えなさい。
問1	本日の授業に候補として持ってきた本をすべて挙げなさい（書名・著者名・出版社名・発行年）。 →1冊だけの場合は、問2へ
問2	確定した本（1冊）を挙げ、それに決めた理由を述べなさい。
問3	本日のグループワークで話し合った内容を述べなさい。
問4	本日の授業の成果（一番学んだこと）を述べなさい。

上記レポートから、多くの受講生が、候補を複数ではなく、すでに1冊に絞っていたことがわかった。但し、1名（4班）だけ、自分のやりたい授業に使える本が見つからなかったとして、候補の本を持ってこれなかった学生がいたので、探す作業を継続するよう指示をした。

問2の記述から、本の選定について、ある傾向が見られた。小学生を対象とした1・2班では、「子ども達への伝え方」をまず念頭に置いて本を選択している者が多かった。他方、高校生を対象とした4班では、「自分の興味関心」から選択しているように思われた。中学生を対象とした3班では、両者の混在傾向が見られた。

問3・問4の記述から、いざ授業づくりを考えてみると、一人では難しいことも、他のメンバーの話を聴くことで、解決の手がかりが得られていることが窺えた。

2-1-3 第3回授業

第3回では、各自の授業案を確定すべく、話し合いを中心に行わせた。そして、各自の進捗状況を全体で共有した。最後に、授業内レポートとして、次のような課題を示した（表2）。

表2 第3回授業内レポート課題

説問	次の各問いに答えなさい。
問1	教材として扱う本を挙げなさい（書名・著者名・出版社名・発行年・本のジャンル）。 *本のジャンル 例) 絵本、小説
問2	本日のグループワークで話し合った内容を述べなさい。
問3	自身の授業案の概要について述べなさい。
問4	自身の模擬授業担当日までにすべきことを述べなさい。

上記レポートの問3から、進捗状況には個人差が見られたが、問4において、各自の課題を見つけて、模擬授業当日に臨もうとしている姿勢が感じられた。なお、教育実習を念頭に置いた模擬授業では、書式の整った「指導案」を作成した上で授業を行うのが常であるが、本授業においては、模擬授業未経験者がそうした指導案を事前に作成するのは難しいと判断し、指導案の作成については指示しなかった。また、敢えてそうすることで、多様な授業形態を提示してくれるのではないかという期待もあった。但し、1で紹介したように、授業の「ねらいを明確化」した上で展開を考えてくることは指示をした。

2-2 模擬授業

先に各自の模擬授業（20分程度で完結させる）を続けて行い、その後、質疑応答と講評を行うようにした。模擬授業時には、対象学年を指定するよう報告者に指示し、報告者以外の受講生全員がその学年の生徒役を務めることとしたが、そうする一方で、参加者には、後に講評を行う際の手がかりとするために「良かった点」「気になった点」「自分の報告の参考になる点」の3点についての気づきのメモも取らせた。また、報告者に対しては、発表後の授業外レポートとして、次の課題を示した（表3）。

表3 報告者用レポート課題

説明	自身の報告（模擬授業）について、次の各問いに答えなさい。
問1	今回、教材として扱った本を挙げなさい（著者名・書名・出版社名・発行年・本のジャンル）。 *本のジャンル 例) 絵本、小説
問2	今回の授業の「ねらい」を述べなさい。
問3	今回の授業の流れを、具体的に述べなさい。
導入	
展開	
終結	
問4	今回の授業で提示した「発問」を順にすべて挙げ、その中で最も重要だと思う発問に○印をつけ、その理由も述べなさい。
問5	もう一度、模擬授業をする機会があれば、どのように改善したいか、述べなさい。

2-2-1 1班（小学1～3年生対象）

模擬授業担当者はAとBの2名だった。両者の対象学年と使用教材は、次の通りである（表4）。

表4 1班の使用教材

担当者	対象学年	使用教材
A	小1	たにかわしゅんたろう／Noritake 絵・へいわとせんそう・ブロンズ新社・2019年・絵本
B	小2	レイフ・クリスチャン・わたしのせいじゃない -せきにんについて-・岩崎書店・1996年・絵本

模擬授業初回、且つ、対象学年が小学校低学年ということで、報告者は相当苦労しているようだった。実際、小学校で「平和教育」を行う場合、授業実践の事例は高学年の公民分野に多く見られるような状況で、低学年に対する授業を自力で作るようというのは、ハードルの高い要請だったのかもしれない。そうした中でも、両名は、それぞれ絵本を教材に、読み聞かせをしたり、クイズを出すなど、手探りで自分なりの授業展開の工夫をしていた。

2-2-2 2班（小学4～6年生対象）

模擬授業担当者はC・D・Eの3名で、対象学年と使用教材は、次の通りである（表5）。

表5 2班の使用教材

担当者	対象学年	使用教材
C	小4	バウンド・数字でわかる！こどもSDGs 地球がいまどんな状態かわかる本・株式会社カンゼン・2021年・文庫本
D	小5	那須正幹・絵で読む 広島原爆・福音館書店・1995年・絵本
E	小6	東克則・平和のとりでを築く・学思会・2010年・論文、説明文

D・Eが共に「原爆」をテーマとするオーソドックスな教材を使用したのに対し、CはSDGsをテーマに据えた点が特徴的だった。平和の問題をSDGsとの関連で語るということは、「平和」概念の射程を広く見る考え方に基づいている（前掲・注3）参照）。こうしたテーマ設定は、他の受講者にも新鮮に映ったようだった。一方、D・Eは、「原爆」という類似のテーマだったため、話し合いの結果、授業形態が被らないように棲み分けをしたようだった。しかし、そのため、一方が「知識」寄りの、小学生にとっては難しい内容になってしまったという問題が見られた。

2-2-3 3班（中学生対象）

模擬授業担当者はF・G・Hの3名で、対象学年と使用教材は、次の通りである（表6）。

表6 3班の使用教材

担当者	対象学年	使用教材
F	中1	田中孝幸・13歳からの地政学～カイズクとの地球儀航海～・東洋経済新報社・2022年・専門書
G	中3	ヴィクトール・フランクル／池田香代子訳・夜と霧（新版）・みすず書房・2002年・小説
H	中3	NHK出版社・日本人はなぜ戦争へと向かったのか・NHK出版・2011年・ドキュメンタリー

この頃になってくると、パワーポイントを使用する（F・G）など、見せ方の工夫をする学生も出てきた。中学生対象の授業は、今後、教育実習でも行うことになるため、他班の学生にとっても、参考となる実践だったと思われる。但し、小学生対象の授業との差別化を意識しすぎて、難しい内容になってしまっているところもあり、また、それを説明しようとして「語り過ぎ」になってしまった学生もいて、さまざまな課題も散見された。

2-2-4 4班（高校生対象）

模擬授業担当者はI・J・Kの3名で、対象学年と使用教材は、次の通りである（表7）

表7 4班の使用教材

担当者	対象学年	使用教材
I	高2	クロード・イーザリー&ギュンター・アンデルス・ヒロシマわが罪と罰－原爆パイロットの苦悩の手紙・筑摩書房・1962年・手紙
J	高2・3	吉田光男・北東アジアの歴史と朝鮮半島・放送大学教育振興会・2009年・歴史
K	高3	小川和久・メディアが報じない戦争のリアル・SB新書・2022年

対象学年が自分達に最も近く、他の班の実践を見てきているということもあり、落ち着いて行っている印象があった。これまでの班と比べて、かなり高度な（論争提起的な）内容のものもあり、参加者に対し、新たな視点が提起されているようだった。また、かなり盛り沢山の内容で、20分ではとても収まりそうにないため、参加者に事前に資料を配付して、ある程度準備してもらおうなどの工夫も見られた。他方、気になった点としては、報告者の意見が聴きようによっては突出しているものもあり、実際の授業での生徒への影響力を考えると、その意見が客観的な裏付けのあるものなのか、ある種の思い込みによるものなのか、報告者自身の自覚が必要と思われた。

2-3 振り返り・まとめ

最終回の第8回で、「振り返り・まとめ」を行った意図は、次の通りである。すなわち、各模擬授業を行った後の「講評」では、時間的制約（特に3名の模擬授業を行った回において顕著であった）もあり、模擬授業を行う上での技術的な話の比重が多かった。模擬授業の実践を全く経験したことのない受講生にとって、細かなスキルの話も必要なことは当然で、その点については、1で示した「本授業の目的」の中に「授業実践のための技量を養う」ことも含まれており、それ自体、意味のないことではない。しかし、「『平和』について考える授業づくり」を行う上で、平和について生徒に考えさせようとする報告者の「ねらい」が、効果的に「発問」に反映されているのか、改めて確認する必要があると考えた。そこで、各報告者が授業後提出した「報告者用レポート」の記述から「授業のねらい」と「主発問」を抜き出し、一覧表（表8）にして受講者に配布した。

表8 対照表：「授業のねらい」と「主発問」

	授業のねらい	主発問
A	「みかた」と「てき」の違いについてクラスで考える	④（みかたのあかちゃん、てきのあかちゃん）、 ⑤（みかた、てき）を見て率直にどう感じたか
B	一人一人の行動に責任が伴っていることを理解し、時に責任をとれないほどの大きな事態を起こしかねないことも同時に理解してもらう。	平和とは何か
C	戦争と原爆以外の別のテーマで平和について考える	平和で思い浮かべるもの？
D	原爆に対する知識を与え、悲惨さを分かってもらい世界の今の状況などに興味を向かせる	核兵器をなくすにはどうすればよいか
E	原爆ドームを題材に今の世界の戦争が絶えない現状から平和について学びを深め、自分たちはどうしていくべきかを考えてもらい今後の活動に生かしてもらう	これからできることとは
F	・自分たちの国の核保有について考えることで戦争や核の話が他人ごとではなく自分たちにも関係のあることだと感じる ・他の人の意見（考え方）を聞いて自分の考えを深める	核兵器を持つほうが平和なのか持たないほうが平和なのか
G	収容所・ジェノサイドの歴史から平和について考える	授業内で紹介した事例から平和を目指すために私たちには何ができるだろうか
H	生徒に戦争が勃発した要因はメディアの報道にもあることを理解してもらい、物事を多くの視点から見つめ考える力をつけてもらう。	現代の私たちは一人の国民として何が求められているのか？
I	イーザリー氏を題材にして、戦争の当事者の気持ちや状況を想像することで、戦争を自分事として考えられるようになる。そして良心の声に従うことや核兵器を使わない決意を固めることを大事にし、平和についてしっかりと考えられるようになることがねらいである。	原爆投下時のイーザリー氏になったと仮定して、あなたなら命令に従って原爆を落とすか。
J	朝鮮半島と日本の関係を知り、現状を考える。	今我々ができること、すべきことはなんだろうか
K	ロシアからの目線でウクライナ紛争に触れ、我々が普段抱いている平和に関して疑問を抱いてほしい	我々は平和を都合よく利用していないか？

第8回授業では、表8に基づき、授業担当者（筆者）と受講生間で質疑応答をする形で、各報告の振り返りを行った。それにかなり時間が費やされたので、各自が平和についての考えをさらに深めるための「まとめ」の時間が不足することとなった。但し、そのような事態はある程度想定されていたため、次善の策として、憲法研究者による「ウクライナ戦争」をとりまく状況に関連する時事的な一般紙の論考⁴⁾を提示して、それを読んで受講生が自分なりの論評をすることで、各自で平和に関する考えを深めてもらうよう指示して「最終レポート課題」とした。

3. 考察

授業実践についての技術的な点を挙げると、多くの受講者が時間管理に苦労しているようだった。時間を超過した学生は意外に少なく、むしろ20分という時間を使い切れず、短時間で終わってしまった学生が多

かった。こちらからは事前にリハーサルをしておくことを推奨しており、ある程度それを実施して臨んだ学生もいたのだが、それでも時間が余ってしまったのはどうしてなのか。考えられる要因として、①人前で話すことになれていない報告者が通常よりも早口になってしまっていたこと、②報告者が質問や発問を投げかけた際、生徒側がすぐに反応してこない、報告者が我慢できずに答えを述べてしまっていたことが挙げられる。しかし、こうしたことは経験不足の影響とも言えるので、今後その点を意識して改善していけば、克服可能な課題である。

より本質的な問題として、特に「討論学習」を行う上で若干気になったのは、模擬授業後の「講評」において、「良かった点」は比較的発言が出やすかったのに対し、「気になった点」について発言する際、受講生の中に遠慮する空気が見られたことである。本授業の受講生は社会科教育選修の同学年で、かなり気心も知っているはずなのだが、それでも「気になった点」（良くなかった点）を指摘するにはためらいがあるらしい。念のため言っておくと、「気になった点」が全くなかったということではない。というのも、受講生が授業中に書いたメモを授業後回収して見てみると、「気になった点」が多々指摘されていたからである。本授業時に、「人格否定発言は論外であるが、学術的に『気になった点』を指摘することは、報告者を否定することではなく、報告者の今後の改善を促す意味で重要である」と述べたが、それでも発言者は少数にとどまっていた。もちろん、改善すべき点を指摘する際、どのようにそれを表現するかについても考慮する必要がある。回収したメモの内容をそのまま言ってしまうと、かなり辛辣な印象を持たれそうなものも多かったもので、どう表現してよいか、とまどいがあったのかもしれない。しかし、こうした点が改善されないと、討論学習の効果は得られにくい。特に、本授業のねらいとした「『平和』の問題をより深く、多角的に考察する」ためには、効果的な討論のスキルを身に付けることは必須の課題と考える。それでも、演習形式の授業の中で、受講生は、他の学生の「平和」に関する考えに多少なりとも触れることで、自身の考えを深めるきっかけを得ることはできたと思われる。

おわりに

本研究では、学生に「平和」の問題をより深く、多角的に考察してもらうことを目的として行った、社会科教育選修1年生が受講する「社会科基礎演習」における「『平和』について考える授業づくり」の実践事例を紹介した。本来、このような教育実践研究においては、当該授業で扱った授業実践の内容を、具体的に細かく分析することが求められるが、本研究では、受講生による実践事例の概略を紹介するにとどまり、各事例の詳細にまで踏み込むことができなかった。この点については、今後の課題としたい。

注および引用文献

- 1) 公益財団法人日本漢字能力検定協会ウェブサイト：「今年の漢字 結果発表」
<https://www.kanken.or.jp/kanji2022/common/data/poster2022.pdf>（最終閲覧2022年12月14日）
- 2) 防衛省・自衛隊ウェブサイト：「憲法と自衛権」
<https://www.mod.go.jp/j/approach/agenda/kihon02.html>（最終閲覧2022年12月14日）
- 3) ヨハン・ガルトゥング（高柳先男・塩屋保・酒井由美子訳）：『構造的暴力と平和』，中央大学出版部，1991年，44頁。
- 4) 水島朝穂：「【特別寄稿】水島朝穂早大教授と考える—今夏の『8月ジャーナリズム』は別の趣」週刊金曜日1388号（2022年8月5日），20-23頁。